

近世時宗における一遍法語への注釈 ——『別願和讃直談鈔』について——

今 枝 杏 子

(比較文化学専攻)

はじめに

『別願和讃直談鈔』は兵庫真光寺初代院代の賞山(一六六五～一七二六)の著書で、上中下三巻からなる。正徳四年(一七一四)一月成立で、同年八月に刊行され、その内容は、一遍の作とされる別願和讃について、宗の内外を問わず様々な經典・典籍を引用し、時には説話を用いながら解説したものである。

時宗教団に関する研究は、その多くが『一遍聖絵』を中心とした開祖一遍に関わるものか、中世阿弥教団としての時衆に注目したものがほとんどであり、近世以降の時宗については対象とされてこなかったといえよう。しかし、一念仏集団であった時衆という宗派となり、宗旨・教義を整えるために教団から多くの教義書・注釈書が刊行された近世期に注目することで、時宗の新たな側面を提示できるのではないかと考える。

そこで本稿では『別願和讃直談鈔』について引用典籍や所収説話について調査検討し、近世時宗教団における注釈行為についてその特徴を明らかにすることを目的とした。また別願和讃については、先行する注釈書として法爾(一五六三～一六四〇)による『別願和讃古註』

があり、本書とほぼ同時期の享保元年(一七一六)には一法(一六六四～一七二五)による『別願和讃新註』も刊行されている。これらと本書を比較しながら、賞山を含んだ近世時宗における注釈行為の特徴についても考察を試みた。

一 概要

はじめに本書の概要として、諸本の確認からしていきたい。国書総目録と、国文学研究資料館HPの古典籍総合目録から、国立国会図書館本、大谷大学本、大正大学本、国文学研究資料館本、三康図書館椎尾文庫本の五種が確認できる。また、この他に調査によって龍谷大学大宮図書館本も確認されており、いずれも版本である。以下、現段階で論者が確認できた本について諸本の特徴を記す。本書は同じく賞山著の『一遍上人絵詞伝直談鈔』十三巻、『神偈撮要鈔』、『一遍上人誓願文標指鈔』各一卷と合冊され、計十八巻として刊行されているので①、書誌についてはそれらとあわせて掲載する。

①国文学研究資料館蔵本

版本。外題『一遍上人絵詞伝直談鈔』。十八卷九冊（内本書三卷一冊）。本書内題『別願和讃直談鈔』。袋綴。朱点・墨書入れあり。裏見返しに「七條道場藏板」。十五・十八巻に識語有り。

【十五卷（誓願文標指鈔）】

攝州大坂八軒屋中嶋屋弥兵衛捨白銀／拾両資助彫刻此誓願文鈔一卷薦／宗慶士緑法梅顔女霜岳真岸士追福

【十六卷（本書上巻）】

攝州兎原郡打出村吉田善四郎悲母善尼／捨白銀三十五両助刻此一巻薦六親眷属菩提

【十七卷（本書中巻）】

攝州兵庫瓜屋甚助施白銀五／両助刻此一巻薦二世安樂

【十八卷（本書下巻）】

当寺塔頭一老覚阿即伝捨白銀三十二両助／刻此一巻薦覚誓暁天和尚覚阿相但之追福

②龍谷大学大宮図書館蔵本

版本。外題『一遍上人絵詞伝直談鈔』。十八卷九冊（内本書三卷一冊）。本書内題『別願和讃直談鈔』。袋綴。①の国文研蔵本と同識語有り。

③三康図書館椎尾文庫蔵本

版本。題箋ナシ。十八卷十八冊（内本書三卷三冊）。本書内題『別願和讃直談鈔』。袋綴。十五巻末に刊記あり。

【刊記】

此彫刻／全部十八巻／当寺蔵版

開版之	洛陽寺町	秋田屋清兵衛
同	柏屋勘右衛門	
江戸芝神明前	和泉屋市兵衛	

各本の特徴を見比べると、本書は少なくとも近世期に二度に渡って刊行されたものと考えられる^②。望月華山編『時宗年表』によると、明和五年（一七六八）に尊如によつて本書を含む十八巻の版木が京都の書肆より購入され、七条藏板とされたという記述があることから

③、国文研蔵本の刊行はこれ以降であろうか。

続いて著者賞山についてその来歴を本書の跋文によつてみていこう^④。

予当初寓鎌倉天照山、下時録浄土二藏義引文私考三巻。住武陽金澤光傳寺、出版之而薦慈父本祐宗源信士之追福。次移野州茂木邑蓮花寺、記二十五菩薩名義鈔一卷謝師德恩海之一滴。後住羽州秋田城邑龍泉寺、篇諸經弥陀採摘二巻供悲母本式妙喜信女之冥福。

今監寺当山誌此絵詞直談全部十八巻。捨白銀六百両而資助梓林彫刻之畢。仰願以此等功德上為傳燈。祖師之謝德下成受大信施之報恩。若余能施諸檀越及六親眷属等亡者速離三有憂苦存者永受二世之安樂。伏乞我生生離苦世世受樂乃至法界有無二縁平等普益同生淨国。

賞山は初め鎌倉天照山光明寺に住み、武州金沢光伝寺で『浄土二藏義引文私考』三巻を出版した。続いて野州茂木の蓮花寺で『二十五菩薩名義鈔』一卷を、羽州秋田城邑龍泉寺で『諸經弥陀採摘』二巻を著し、兵庫の真光寺で本書含む十八巻を執筆したことが確認できる。光明寺は近世には浄土宗関東十八檀林の第一位の寺院とされ、おそらく賞山はここで浄土教学を学んだのだろう。また、『一遍上人絵詞伝直談鈔』の序文には、正徳元年（一七一）四月二十九日に遊行四十八世の賦国から真光寺の初代院代への着任を命じられたことが書かれる^⑤。その後沼津西光寺に移り、享保十一年（一七二六）に六十二歳で死去した。賞山は本書や先に述べた本の他に、『播州問答私考鈔』『百利講

略註」などの著書が『国書人名辞典』によって確認でき、近世時宗における学僧の一人であったといえよう。

本書の内容について論を進める前に、まず「別願和讃」について確認しておきたい。「別願和讃」は阿弥陀佛の四十八願のうちの第十八願念仏往生の願について弘安十年（一二八七）に一遍が作詞したとされる和讃であり、数ある時宗の和讃の中でも主要なものとして踊躍念仏にも用いられている^⑥。その本文は『一遍上人語録』に収録されている他、『一遍聖絵』や『遊行上人縁起絵』にも記載がみられ、七十句のものと八十六句のものが伝わる^⑦。その内容は、『時宗辞典』によれば「まず人生の無常を述べ、次いで弥陀の本願を説き、そして最後に一心専念、弥陀の名を称えれば命終のとき聖衆が来迎することを書く」ものである。

本書では七十句の別願和讃を四句一讃、結びのみ六句一讃として解説している。本書執筆の動機については自序に

爰宗祖上人以和語讃頌是願。曰別願和讃。授之時衆諷焉。自時。厥後凡汲宗流者。無不口熟耳染。而至其義旨。含蓄幽奧不易通曉。余間每接礼謁翁媼。挙之敷演時。筆其梗概。備自悠忘。兼示吾党幼学云。

と、時宗門徒の間に広く流布している別願和讃の内容について参詣者に説明した際の覚え書きを、初学者のために示したものであると書かれ、一般門徒に向けて刊行されたものとわかる。しかしその内容は和讃の語句について種々の經典を引用しながら語釈を施しており、また和讃以外の本文は漢文体で書かれており、全体としては和讃そのものよりも難解になっている印象が否めない。次章ではまず本書に引用されたさまざまな仏教典籍について検討する。

二 「別願和讃直談鈔」に引用された典籍

本書は別願和讃を注釈する際に様々な經典や書籍を引用・参照し、典拠となっている書名を明記していることが特徴としてあげられる。本章ではこうした引用典籍から、賞山の典籍利用の傾向について検討してみたい。

典拠・参照として挙げられている書名は百四十種に及び、紙幅の都合上引用回数が多いものについてのみ触れることとしたい。まず經典類についてみると、最も引用頻度が高いのは諸經要集であった。諸經要集は『一遍上人絵詞伝直談鈔』においても繰り返し引用されており^⑧、賞山の教学研究の際の座右の書であったことがうかがえる。次いで多く引用されていたのは大智度論であった。浄土教系の典籍としては、根本經典とされる無量寿經、觀無量寿經、阿弥陀經の他、安樂集、往生要集などがみうけられた。この他、雜宝藏經のような原始仏典や涅槃經、維摩經、大集經といった大乘仏典も引用回数が比較的多かった。

經典類の他は、法苑珠林、三国伝記、古今著聞集、発心集などの和漢の説話類や、元亨釈書、後拾遺往生伝、唐土往生集といった僧伝・往生伝も引用されていた。法苑珠林は説話の典拠とされるだけでなく、その本文を語注レベルでも利用しており、賞山は説話集というよりも經典類に近い扱いをしていたようにみえる。

時宗典籍に限ってみると、挙げられている書名は意外に多くなく、『播州問答集』『播州法語』『真宗要法記』『器朴論』『別願和讃古註』のみであった。このうち『古註』については四章で詳しく述べる事にする。

これら時宗典籍のうち最も数多く、そして意図的に引用されたのは『播州問答集』であった。『播州問答集』は播磨国弘嶺八幡宮におけ

る持阿と一遍の問答を記述したものであり、貞享五年（一六八八）に刊行されている。今まで述べてきた典籍は、どの本も本書の上中下巻にわたってほぼまんべんなく引用が見られるが、『播州問答集』は下巻のみに集中して引用されている。本書の下巻は別願和讃の四十五句から七十句についての注釈で、一心の念仏を勧める、いわば時宗教義の根幹ともいえる内容となっている。賞山は全体を通して宗内外の經典から広く引用を求めながらも、こと時宗の教義に関しては開祖一遍本人の言葉を用いようとする姿勢が見いだされるのである。なぜ一遍の言葉を引用するのに賞山が『播州問答集』を使っただかということに関しては、今後他の賞山の著作について調査をすすめ、検討していきたい⁹。

三 所収説話について

本書には注釈に際して全部で四十二話の説話が採録されており、数話を除いて典拠とした書名も明記されている。以下にそれらの説話を掲げる。説話の題は本書目録に従い、その下に本書の目録における通し番号をつけた。「」内に典拠として示されている書名を記す。

- 一、 王女欲泡鬢事 上三「出曜經」
- 二、 無常迅速喻之事 上六「涅槃經」
- 三、 佛比丘問無常事 上七「諸經要集」
- 四、 安養尼之事 上八「古今著聞集、旧記、続往生伝」
- 五、 梵士兄弟四人之事 上十一「三国伝記」
- 六、 天人五衰之事 上十二「六波羅蜜經」
- 七、 紹明法師之事 上十五「儆戒録」
- 八、 目蓮見一餓鬼事 上十六「諸經要集」

- 九、 兄生牛弟得道事 上十七「諸經要集」
- 十、 須摩手提長者事 上二十「諸經要集」
- 一一、 楊貴妃死求魂魄事 上二十一「長恨歌、楊貴外伝」
- 一二、 龍樹菩薩之事 上二十二「龍樹菩薩本伝」
- 一三、 蓮花女之事 上二十四「法句經」
- 一四、 梵士女死事 上二十五「法句經」
- 一五、 婆羅不知宿世事 上二十七「諸經要集」
- 一六、 大通結縁之事 上二十九「法華經」
- 一七、 醉人不知衣裏珠事 上三十
- 一八、 婆羅門得道之事 上三十一「雜阿含經」
- 一九、 行基菩薩之事并智光法師至閻王宮事 中五「元亨釈書」
- 二十、 恵布法師之事 中六「浄土礼懺儀」
- 二一、 善生比丘惡見之事 中九「涅槃經」
- 二二、 提婆達多之事 中十「大智度論」
- 二三、 提婆欲殺佛之事 中十四「雜宝藏經」
- 二四、 輔相婆羅門之事 中十五「雜宝藏經」
- 二五、 申日長者惡邪之事 中十六「諸經要集」
- 二六、 生盲不知乳色事 中十八
- 二七、 徳山到龍潭之事 中十九
- 二八、 佛因位善恵仙人事 中二十八「因果經」
- 二九、 貧賤女成王后事 下三「雜宝藏經」
- 三十、 子安再活之事 下六「列異伝」
- 三一、 舍利弗退位之事 下十二「大智度論」
- 三二、 鬱頭羅弗惡願之事 下十三「涅槃云疏、宗鏡録、大智度論」
- 三三、 四禪比丘邪見之事 下十四「大智度論」
- 三四、 思恭成牛事 下十七「旧記」

三五、釈明琛成蛇事 下十八「明琛伝」
三六、釈無空成蛇事 下二十二「元亨釈書」
三七、釈講仙生蛇事 下二十三「元亨釈書」
三八、玉泉房成鬼事 下二十四「諸経要集」
三九、唐僧柔往生之事 下二十八「唐土往生集」
四十、宋基法師往生之事 下二十九「唐土往生集」
四一、宋孫良往生之事 下三十
四二、宋沈銓往生之事 下三十一「唐土往生伝」

賞山の説話採録の方法としては、ほぼ原典から忠実に引用しているものと、粗筋だけをまとめているものがあり、その違いは記載の仕方にも表れている。例をあげると、一の説話は出曜経の該当箇所をほぼ原文どおりに引用しているが、その場合は「出曜経十七六紙云。」と書き出され、末尾には「已上」と書かれる。忠実な引用ではなく大意を載せた場合は末尾に「法句経意」等と記されていた。

全説話を見渡して見ると、僧伝的な説話が各種往生伝等に依拠している他は圧倒的に經典からの採録が多いことが指摘できる。また、同時代や巷間の説話も見いだすことができない。時宗に関連する説話がないことも特徴的であるといえよう。

各巻毎の説話の採録数は、上巻十八話、中巻十話、下巻十四話となっており、全体にわたってほぼ偏り無く説話が配置されている。では本書の中で説話はどうのような役割を果たしているのか、本書の註釈形式と合わせて、第一讚「身を觀ずれば水の泡 消ぬる後は人もなし 命をおもへば月の影 出入息にぞとどまらぬ」についての註釈部分を具体例として説明したい。本書ではまず和讃本文を掲げたあと最初に「此四句一讚。挙身命無常自示厭離觀身水泡者。」と、この一讚の概要を

述べ、続いて同様に人生を水の泡に例えた具体例を金剛經、維摩經、天台淨名疏から引用する。第一讚ではここで一の説話が挿入されている。その後「消後人無」や「念命月影」「出入息不停」の各句の単位でまた種々の典籍を引用して説明する。そして最後にこの讚のまとめとして二から四の説話を、人生の無常を悟った具体例として列挙するのである。本書では、数話を除いた多くの説話がこのように各讚の註釈の最後に数話並べて採録されており、賞山がそれぞれの讚を象徴するように説話を配置していることがわかる。

四 『別願和讃古註』と『別願和讃新註』

別願和讃には本書の他に『別願和讃古註』（以下『古註』）と『別願和讃新註』（以下『新註』）の二種の注釈書がある。本章ではそれらとの比較を通して近世時宗の注釈の特徴について考察してみたい。

まずはそれぞれの概要について述べる。時宗宗典の解説によれば、

『古註』は、著者は遊行三十五代法爾上人（二五六三―一六四〇）で、版本がなく写本のままで伝わっており、別願和讃について非常に簡略な註がつけられたものである。本来の書名は伝わっていないが、『別願和讃新註』の成立に伴い『古註』というようになったとされるが、『新註』より数年早く刊行された本書内でも『古註』と記されており、江戸中期には既にこの名が定着していたものと考えられる。本稿では本文として定本時宗宗典を用いた。『新註』は遊行四十九代一法（一六六四―一七二五）が著したもので、本書刊行の二年後享保元年（一七一六）に京都の書林から刊行されている。上下二巻からなり、多くの經典等を用いて和讃を綿密に講じたものである。『古註』『新註』ともに八十六句の和讃を用いているが、『古註』には末尾の四句がなく八十二句のみ書かれている。

まず、『古註』との関係についてみると、先にも述べたように本書内には『古註』の本文をそのまま引用した、或いは『古註』にも記述が有る旨を述べた部分が十二箇所あり、先行する別願和讃注釈書として大いに参考にしていた様子がうかがえる。こうして『古註』を受容する一方でその内容を批判的に読む箇所も見受けられる。次に示したのは『直談鈔』内で別願和讃第九・十二句「眼の前のかたちは盲て見ゆる色もなし 耳のほとりの言の葉は 聾てきく声ぞなき」について書かれている部分である。

古註以此一讃約命終時判之。是亦於義雖不可背。今以愚意考之。

此讚及下讚示一生無常歟。

『古註』がこの讃を臨終の場面のことをいうのに対して、一生の無常を示したものであると述べる。賞山は先学を取り入れながらも、自身による新たな解釈も示しているのである。一方『新註』には本文中に『古註』に関する記述はみられない。『古註』の伝来の状況に不明な点が多いので単に『新註』の著者一法が『古註』を見ていなかった可能性も考えられるが、『古註』が和讃の大意を簡略に記すのに対して、『新註』は和讃に対して詳細な語注をつけることに眼目をおいている。その方向性の違いから『新註』は『古註』を顧みなかったのだろうか。

引用典籍についても比較をしてみたい。まず『古註』には、冒頭の金剛經の他は、典籍の引用は見いだされなかった。『新註』は多くの典籍を用いており、その点は『直談鈔』と共通した特徴であるといえよう。しかし、ほぼ同時期に成立した二書であるが、引用典籍はやや異なる位相をみせる。本書において最も多く用いられた諸經要集は『新註』では一度も引用されなかった。大智度論、安樂集も『新註』では各二箇所に引かれるのみであった。逆に『新註』の方で重用される書物も見いだされ、特にその傾向が目立ったのは『説法明眼論』『阿弥

陀經疏鈔』『摩訶止観』『宗鏡録』である^⑩。そもそも、本書と『新註』の両方で同じ註がつけられている部分は七箇所ほどしかない^⑪。また、賞山が和讃の深意を説明するのに説話を多く採録しているのに対して、『新註』は全体を通してほぼ語注に終始しているのも二書の大きな違いである。

時宗という教団の中心である遊行上人の一派と、先代の遊行上人の賦国から真光寺の院代となることを命じられた賞山。同時代に時宗教団の中心にあった^⑫二人の手による注釈書にこのような違いが生じ、またその両方が同時期に刊行されたのはなぜか。今後、両書の特徴をさらに精査して検討する必要があるが、ここでそうした疑問を引用典籍の相違から考察する手がかりを提示したい。それは、『新註』にのみ引用が見られた『説法明眼論』である。

『明眼論』は中世に成立した教理書で、聖徳太子の述作として宗派を問わず広く流布しており、各宗派の仏教書に積極的に受容された。鈴木英之氏によると^⑬、浄土宗においては、白旗派・名越派・西山派の学僧たちが頻繁に教書書に取り込んでいるという。『新註』の中で『明眼論』に典拠を多く求めていることは、一法の浄土教学が浄土宗のこれらいずれかの派からの影響を受けていることのあらわれと考える事はできないだろうか。また『宗鏡録』は禅林に広く流布したものであり、時宗の注釈に用いられるものとしては違和感が強い^⑭。今後は、こうした本の近世における流布状況の把握とともに、一法その他の著作における典籍利用について調査をすすめていきたい。

結

以上、『別願和讃直談鈔』について、引用典籍と所収説話についての調査結果の報告と、そこから導き出される賞山の注釈の特徴につい

て述べてきた。賞山は本書執筆にあたり、その解説にさまざまな典籍に典拠をもとめているが、一心念仏を勧める部分に限っては意図的に『播州問答集』から一遍の言葉を用いている事がわかった。また、和讃に含まれる教義について理解を深めるために、語注的な説明の後に各讃の要点に関連する説話を数話ずつ配置していることも判明した。

こうした多くの仏典引用によって、別願和讃そのものよりも繁雑でわかりにくいものとなっている印象の本書であるが、そこに賞山の意図を見出すとするならば、初学者に向けたものであるとしながらも、さらに時宗の教学書としての役割をこめようとしたからではなかっただろうか。

『別願和讃古註』『新註』と比較してみたとき、本書の特徴はやはり説話の採録ということがいえるだろう。本書が「別願和讃」について『註』ではなく『直談鈔』という体裁をとっていることは賞山の研究姿勢を考えるとときに重要となってくるであろう。この点『一遍上人絵詞伝直談鈔』とあわせて検討していきたい。

今回は、引用典籍に注目して論をすすめたため、内容について深く考察を加えるに至らなかったが、今後は賞山による教学研究の特徴を明らかにしつつ、近世時宗の説話利用についての研究をすすめていきたいと考える。

【注】

(1) 現段階で確認した本はいずれも十八巻中、一〜十三巻が『一遍上人絵詞伝直談鈔』、十四巻が『神偈撮要鈔』、十五巻が『一遍上人誓願文標指鈔』、十六〜十八巻が『別願和讃直談鈔』の順となっていた。

(2) 大谷大学蔵本については、『一遍上人絵詞伝直談鈔』のみ調査で

きている。これには十三巻末に他の本に見られない刊記があることから、ここに挙げた三本とは異なる版であると推測される。

(3) 望月華山編『時衆年表』(角川書店 昭和五十三年) 一七六八年の項に「秋尊如京の書肆柏屋勘右衛門より『播州問答集』二巻『絵詞伝』四巻『直談鈔』十八巻『統要篇及一切経音義』百巻の版本を購入七条道場蔵版とす」とある。

(4) 引用は国文研本により、論者が適宜句読点を付した。

(5) 『一遍上人絵詞伝直談鈔』序文

昔我カ鼻祖ニ遍大士遊ニ化シテ諸方ニ足跡殆ク遍シ天下ニ。晩ニ息ヘテ錫ヲ于撰南兵庫ノ観音堂ニ無シテ幾レモ示ニ滅ヲ於此ニ。徒衆相共ニ茶毘ヲ收拾シテニ靈骨ヲ一藏メニ諸ノ堂ノ側ニ建シテ塔識スレ之ヲ。又結テ一字ヲ於塔之左ニ奉安シ大士所ノ手彫スル一自ノ肖像ヲ上香火供事ス。号シテ為ニ西月山真光寺ト焉。二祖他阿上人繼テ踵ヲ於此ニ弘道布化ス自レ時綿綿トシテ四百余年于今ニ矣宝永年間ニ嗣祖四十八世上人遊化シテ入リ寺ニ礼シテ塔ヲ拝シ影ヲ乃集メニ各院ノ衆ニ謂テ曰此ノ寺実ニ係ルニ開山入寂之地ニ有リ墳墓ニ焉有リニ影堂ニ焉誠ニ一方ノ望利也。衆ノ奉事豈有ニ無状ニ。然レトモ而宜シテ置テ監寺ヲ一視シシムレ之上敬也。遽ニ以テ其ノ職ヲ一命スレ余ニ。余辞讓スレトモ不見シテ許遂テ來監ス焉。乃塔洒掃シ乃影香火ニ三時礼懺シテ自ラ修シ勤ムレ他ヲ。

(6) 吉川清『時衆阿弥教団の研究』(池田書店 昭和三十一年)

金井清光「時宗教団と和讃―中世民衆のエネルギー―」(『国文学解釈と鑑賞』第五五巻五号 至文堂 平成二年五月)

(7) 八十六句の末尾十六句は後人の補遺とされる。

(8) 『一遍上人絵詞伝直談鈔』については、平成二十三年説話文学会新潟大会で口頭発表。別稿を予定している。

(9) 近世時宗教団では、一遍の伝記や法語の中で特に『播州問答集』が重んじられていたのか。今後の課題としたい。

『日本思想体系 法然 一遍』(岩波書店 昭和四十六年)

(10) それぞれの両書における引用回数は『明眼論』は『新註』5回『直談鈔』なし、『阿弥陀経疏鈔』は『新註』5回『直談鈔』なし、『摩訶止観』は『新註』7回、『直談鈔』2回、『宗鏡録』は『新註』9回『直談鈔』3回であった。

(11) 共通していた部分は次の七種の語の語釈部分である。該当語と「」内に引用書名を記した。

① 出入息「大集経、住法記、安般守意经、六波羅蜜经、摩訶止観」
 ② 盲「积名」③ 聖道「安樂集、大集月藏经」④ 煩惱即菩提「仁王经、嘉祥疏、宗鏡録」⑤ 最後十念無而「播州問答集」⑥ 此時「阿弥陀经」⑦ 授手「九品儀」

(12) 真光寺は一遍示寂の地であり、『時衆年表』によると歴代遊行上人が立ち寄ったり寄進をしたり、また天皇の勅額を賜っていることがわかる。時宗内で重要視されていたのだろう。

(13) 鈴木英之「伝聖徳太子述作『説法明眼論』の性格と流布―中世太子信仰の一齣―」(『説話文学研究』第四一号 平成十八年七月)

(14) 『宗鏡録』の受容については荒木浩氏の「無住と円爾―『宗鏡録』と『仏法大明録』の周辺―」(『説話文学研究』第三五号 平成十二年七月) などがある。

【参考文献】

- 『定本時宗宗典』上・下 (時宗宗務所 昭和五十四年)
 『時宗全書』(芸林舎 昭和四十九年)
 『時宗辞典』(時宗宗務所教学部 平成元年)
 『日本古典文学大系 仮名法語集』(岩波書店 昭和三十九年)

Shozan's *Betsugan wasan jikidan sho*

How the Early Modern Ji School Annotates Its Founder's Teachings

IMAEDA Kyoko

Betsugan wasan jikidan sho [A Commentary on *Ippen Shonin's Buddhist Chants*] by Shozan (1665-1726), a Buddhist monk and scholar of the Ji school of Japanese Pure Land Buddhism, is a book of annotation on a series of Buddhist chants attributed to the founder of the school, Ippen Shonin (1239-1289), and collected in *Ippen shonin goroku* [*The Record of Ippen Shonin's Teachings*]. Published by Jishumon Shobo (the publishing section of the Ji school) in 1714, it annotates these doctrinal chants 唄 唄 Betsugan wasan 唄 唄 with abundant quotations from the sutras both orthodox and unorthodox in the Ji school, and also explains the doctrine of the school with the help of various Buddhist legends.

The present study defines the characteristic of Shozan's work by surveying the classical Buddhist writings he cites in it, and analyzes his attitude as an annotator through the comparison between the Buddhist legends quoted in his commentary and their original versions.

To make clearer Shozan's uniqueness, this study also contrasts his commentary with the other two Buddhist works on "Betsugan wasan," *Betsugan wasan kochu* [*The Old Annotation of "Betsugan wasan"*] by Hoji (1563-1640) and *Betsugan wasan shinchu* [*The New Annotation of "Betsugan wasan"*] by Ippo (1664-1725).